

生活者たちの「社会」観

—— 5 人の人びとからの「聞き書き」の再構成 ——

真 鍋 一 史
柳 原 佳 子

1. 「社会観」を描出する方法

「社会」ということばにはあるよそよそしがあるといわれている。それは世間や世の中という、社会とほぼ同義のことばとくらべてみるとはっきりとする。世間や世の中ということばには、日常の具体的な生活のなかでの喜びや悲しみを包み込んだ、いわば生活のにおいがあるのに対して、社会ということばには、知的な響きはあるにしても身近な親しみは感じられない。

これは、一つには社会ということばが、明治以降、西欧思想の輸入過程で翻訳語(society⇒社会)としてつくり出された語であり、比較的新しい日本語であるということによるが、このような事情とも関連して、第二に、社会ということばの用いられる文脈が、どちらかといえば専門的な活動領域、たとえば政策決定や行政の分野、あるいは研究の分野などに限定されて、日常生活の言語として定着していないということにもよる。

しかし、だからといって日本人がいわゆる社会ということについて考えたり感じたりしていないというわけではない。明確な社会観として結晶化されたかたちで意識されてはいなくても、人々はみずからの生活史や現在の環境などを通して、自己と他者たちとの関係や人間とモノ、人間とシンボルについての関係に対して、それぞれ独自の仕方の意味づけをしている。

では、そのような潜在的な社会観をすくいあげようとするればどんな手法が適しているか。このよ

うな課題を追求する場合、一般に統計的な質問紙調査が行われることが多い。確かにこのような調査法は多くの人々のものの見方や考え方、感じ方についての全体的な傾向を描出する仕方としては有効である。が、その反面、一人一人の人間がどのような経過をたどって、なぜある一定の、たとえば社会観をもつにいたったかという側面をとられようとするとき、いわゆる統計的手法ではその目的を達することができない。そこで個人個人の社会観の形成過程や、現在の生活実態との対応状況をみようとする場合、これは本論で採用した手続きでもあるのだが、その方法として次のような手続きが適切だと思われる。

(1)まず、さまざまな生活史をもち、多様なくらしを営む人たちを何人か選び(本論では5人)、それぞれの人々に各自の「社会」観について語ってもらう。その際、各人が「社会」ということばで意味するもの、あるいは「社会」ということばに盛り込むべきだと考える内容は、各自の自由発想に全面的にゆだねる。そうすることで、話し手のイメージする「社会」の外延と内包とがあらわれてくると考えられるからである。ただし、社会観を抽象的概念として語るのではなく、各自の幼年期からの生活史と現在の生活経験を通して具体的に話してもらうことを条件とする。

各人の語りはテープ録音する。また、聞き手は、話し手に対して補足してほしい点、あるいはさらに立ち入って話してほしい点などについて質問することもありうる。

*本研究は、1983年度財団法人21世紀ひようご創造協会「市民意識の研究」(実証的研究のための準備作業)の一環として行われたものである。

(2) 各人の話を録音テープをもとに文字化し、次に、それらの文章を一つの意味をもつステートメントごとにカードに書き抜く。

このようにして、カード1枚につき1命題というかたちで集められたカード群を、K J法A型による図式化とK J法B型による文章化の方法¹⁾を用いて整理する。

つまり、各人の社会観の形成・存立機制を、一方では要因連関図にまとめ、他方でその概略を文章化するわけである。

(3) このようにして得られた全員の事例データから、それらに共通する変数を抽出し、これら共通の諸変数と諸変数間の連関パターンを総合して、社会観についての全体的な布置連関図式を作成し、この図式についての解説を試みる。

(4) このようにして構成された全体的な布置連関図式をもとにして、話し手たち自身によって社会観についての議論を展開してもらう。そこから、現状の社会の問題点、反省点、課題などをピックアップし、それらを全体的な布置連関図式につ

なぐ。

本論では、この作業プロセスに従って行なわれた試みを、(2)の後半以降、順を追って展開していくことにする。

2. 5人の報告事例

——生活史と社会観

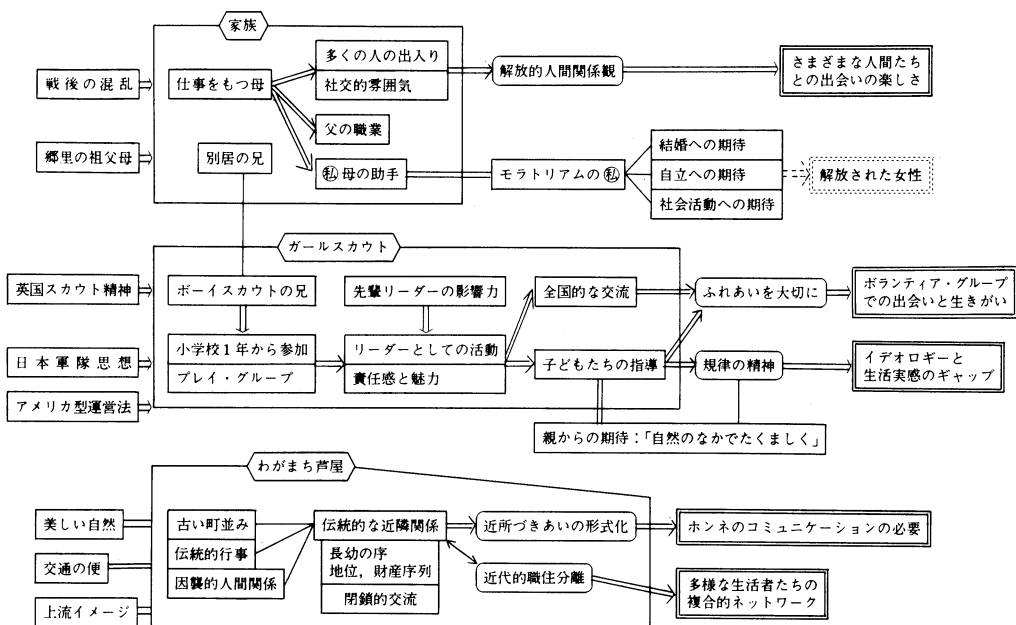
(1) Nさんの社会観

〔Nさん; 31歳, 女性, ガールスカウト
・リーダー, 芦屋市在住〕

Nさんの生活のなかでは、家族、ガール・スカウト、彼女の住むまち芦屋という3つの領域が、重要な意味をもっている。

第1に、家族に関しては、とくに母の職業（編物教室経営）がNさんの生育歴に大きな影響を及ぼしているようだ。たとえば、幼いころからの、家庭へのさまざまな人々の出入りや開放的な人間関係が、彼女の現在の社会的態度を形成したと彼女自身が語っていること、大学卒業後、母の助手をしてきたことなどにもそのことがうかがえる

図1 Nさんの社会観の要素連関図



1) K J法A型, B型については、川喜田二郎『発想法』中公新書, 1967, 川喜田, 『続・発想法』中公新書, 1970を参照。

し、家庭への強い愛着（と依存）の表明は、とくに母親への愛着と依存のあらわれであるとみてよい。

第2に、小学校1年生のときに参加して以来、現在もリーダーとして活動を続けているガール・スカウトとのかかわり。Nさんにとってスカウトは、思想・規律の伝授の場というより、多くの人々との出会いとふれあいの場、子どもたちの指導を通しての社会参加の場であり、人間同士のつながりの大切さを体験できる場であるという。

第3に、Nさんの住むまち芦屋への愛着。古い町並み、今も残る伝統行事、幼なじみ、交通の便利さ、多少、因襲的な近隣関係など、伝統的なものへの抵抗や地域活動の消極性への不満も含めて、住みなれた我がまちへの彼女の愛着は深い。

だが、これら3つの領域のそれぞれからNさんに対してよせられているであろう役割期待——地域子ども活動の指導、母の助手、結婚、スカウト・リーダー——は、ときに互いに相克し、彼女をいらだたせることがある。

このような状況にあるNさんにとって、今、みずからの置かれた状況のなかでくらし続けていくためにも、また、生活領域のそれぞれの限界を切

り拓いていくためにも、彼女が望ましいとする社会のすがたとは、人と人とがスムーズにコミュニケーションを営める社会、人と人とがふれあいを大切にしい、多様なグループが連帯しあえる社会、個人生活の多様性をみとめつつも人々の生活の根拠地としての開放的なふるさととなりうる社会である。

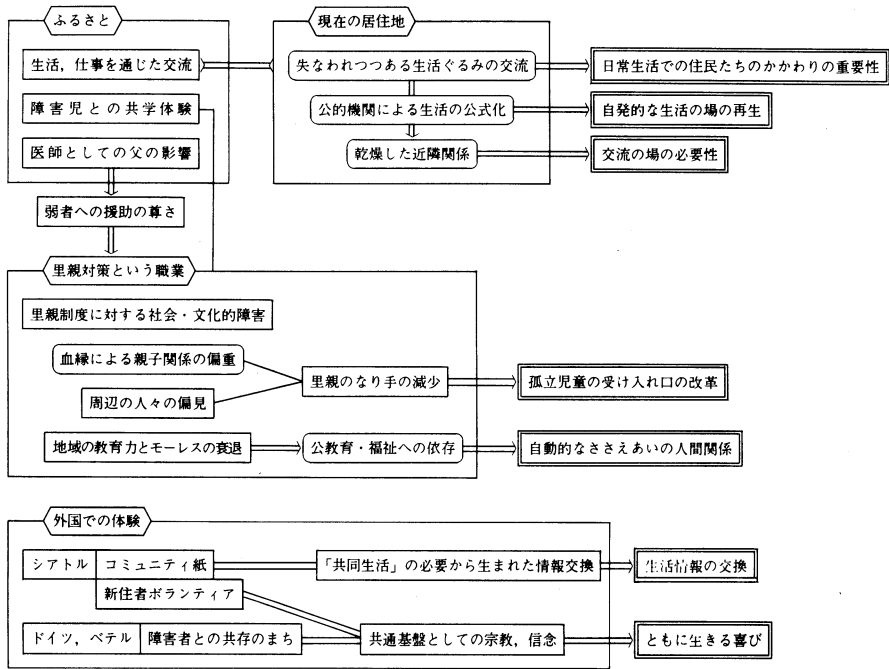
(2) H氏の社会観

〔H氏；39歳、男性、家庭養護促進協会）
事務局長、神戸市在住〕

「社会」ということばからH氏がイメージするのは、ふるさと、アメリカのシアトルのまちとドイツのベテルというまちでの体験、そして現在の居住地と現在の彼の仕事のことであるという。

H氏が社会について考えるとき、その出発点として彼のふるさと体験がある。ふるさととは、いわば彼にとっては郷愁の原社会である。そこでは、人々は日常の具体的なくらしの上での交流と、地元の人々の必要に根ざした仕事（洋服仕立屋、お菓子屋、八百屋など）の上での交流を通じて、相互に不可分、密接に結びついていた。ふるさととは、従って一定の地域空間におけるトータルな生活の

図2 H氏の社会観の要素連関図



また封建的な因襲が強く残るところであった。そのようななかで、彼の両親はかなり進歩的な考え方の持ち主で、家督や家業に子どもたちを拘束することはなかった。また教育が何よりの投資だと考えていた。K氏によれば、彼のふるさとイメージはあまりよいものではないという。

K氏は金沢で学生生活を送る。1960年代後半、歌声運動のさかんころであった。

大学卒業後、東京の企業に就職。電算機関係の企業で、彼はソフト・ウェア部門に係属して働くが、組織の中での限定された職務の限界に気づくようになる。残業の続く毎日、自分の時間が企業に奪われていくなかで、同時に労働者意識にもめざめたという。仕事の専門知識や能力の生かせる仕事を、と考えていた。

そのころ住んでいた地域はいわゆる下町で、近所づきあいも円滑で人情味あるれるところではあったが、反面、大気汚染の激しいところで、彼の妻が公害性ぜんそくにかかったことや子どもが生まれたこと、そして仕事上の考えもあわせて、転職・転居への意思は強まった。

もともと教育には素朴な関心はあったし、妻の教員キャリアの影響もあって、教職に就き、自然環境に恵まれた現在の居住地へ転居した。

K氏の現在住んでいる地域は、隣保組織が緊密で、子ども会や消防団活動などもさかん（彼自身も自衛消防団員である）であり、近隣の結びつきは強い。だが、長期在住者と新入者との関係はときにデリケートな問題を引き起こすこともあるようだ。住民相互の活気ある地域づくりが大切であるとK氏はいう。

さて、教職生活に関して、K氏は教師は「天職」と断言する。その観点から最近の教師たちを評価すると、彼らにはプロ意識も社会常識も稀薄で、自己中心性がめだつという。学校教育全般については、教育内容の知育偏重の問題性、公教育への過剰期待と私教育（＝家庭・地域）の不足のアンバランスの問題が、解決すべき課題であるとK氏は考えている。それらへの解決策ともいうべき彼の教育観は次のようなものである。まず、基本的なしつけや情操教育は家庭の役割であり、身・心のバランスのとれた発達と知・情・意の学習の場を提供するのが学校である。そしてこれら

2つの教育機能をささえるのが、地域や社会での道徳教育・社会教育である。このような教育ネットワークのもとに、子どもは各自の家庭や地域の文化的伝統を継承したり、みずからの社会的立場を学習しつつ、年長者や同輩、仲間、年少者たちとともに活動していく喜びを体得していくのである。

地域に生活する公・私の人びとが相互に緊密な協力関係を取り結んでいらしめていくことが、K氏の描く望ましい社会像である。

(4) S氏の社会観

{ S氏; 42歳, 男性, 会社員, 労働組合 }
副委員長, 神戸市在住

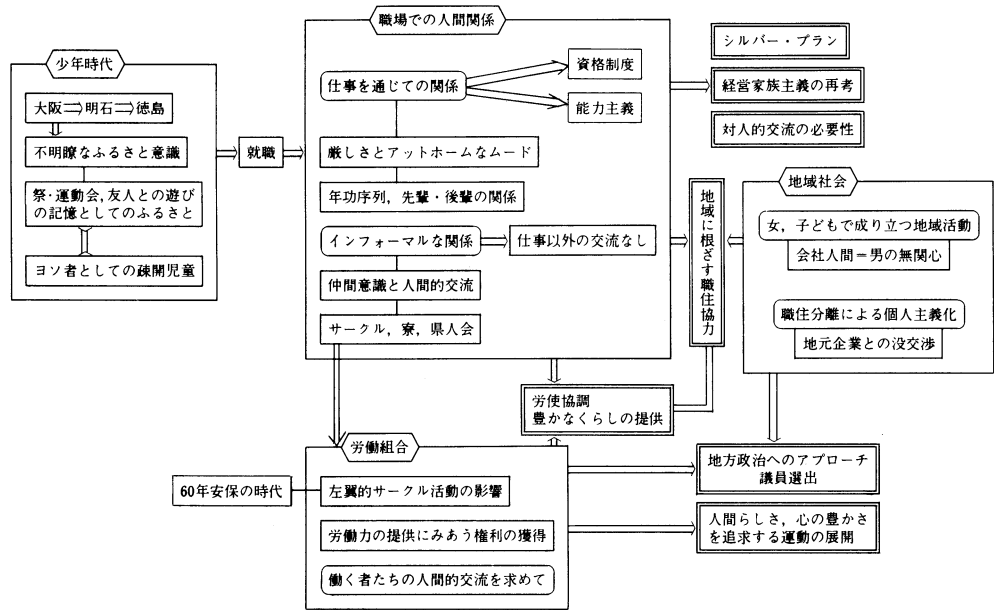
S氏の少年期は大阪から明石へ、学童疎開で徳島へと、その生活の根拠地が移動する。したがって、ある特定の土地への明瞭なふるさと帰属意識はなく、むしろ祭りや運動会、神社の境内で友だちと遊んだことといった人々との交流の記憶がふるさと意識の核である。

中学卒業後、就職して寮生活をするかたわら、サークル活動に参加する。

職場では、仕事を教えたり教えられたり先輩・後輩関係が、厳しくはあったが親密でかけがえないものであった。だがこのような人間関係は企業の技術革新とともに衰弱し、かわって、専門的知識を前提とする資格制度、生産性を求めている能率主義、能力主義が台頭する。他方、職場での同僚や同志からなるインフォーマルな人間関係、たとえばサークルな県人会など、あるいは寮での長幼の序を重んじる人間関係、これらは従来、仲間意識の形成や人間交流にとって貴重なものと考えられてきたが、職場関係の変容に呼応してこれらの関係も解消していく。このような傾向に対してS氏は、経営家族主義を近代的なかたちで再考すること、企業内での人間的交流の必要性、来たるべき高齢化社会にそなえての停年制の再考やシルバー・プランの推進を提案する。

さて、S氏の現在の労働組合活動の起源ともいえるサークル活動。その背景には'60年安保、「左翼思想の流行」があったと彼は述懐しているけれども、そのサークルへの参加の直接動機は密接な対人交流（女性との交流をも含めて、とS氏は付

図 4 S 氏の社会観の要素連関図



最後に彼の住む地域についてみると、そこでの自治会活動が女性、とくに主婦によって運営されていること、地域の人間関係が子ども、学校を契機としてようやく成り立っていることが特徴的であり、他方、会社人間と化した男性の地域に対する無知、無関心が著しいと、S氏は語る。また全体的には、職住分離の進展に伴って、生活者、のみならず、地元企業もまた地域から孤立する傾向にある。

このような傾向への対応策としてS氏は、地域の実状に応じた企業と住民との相互協力関係の樹立、組合運動と住民運動のタイ・アップによる地方政治への参加を提案する。

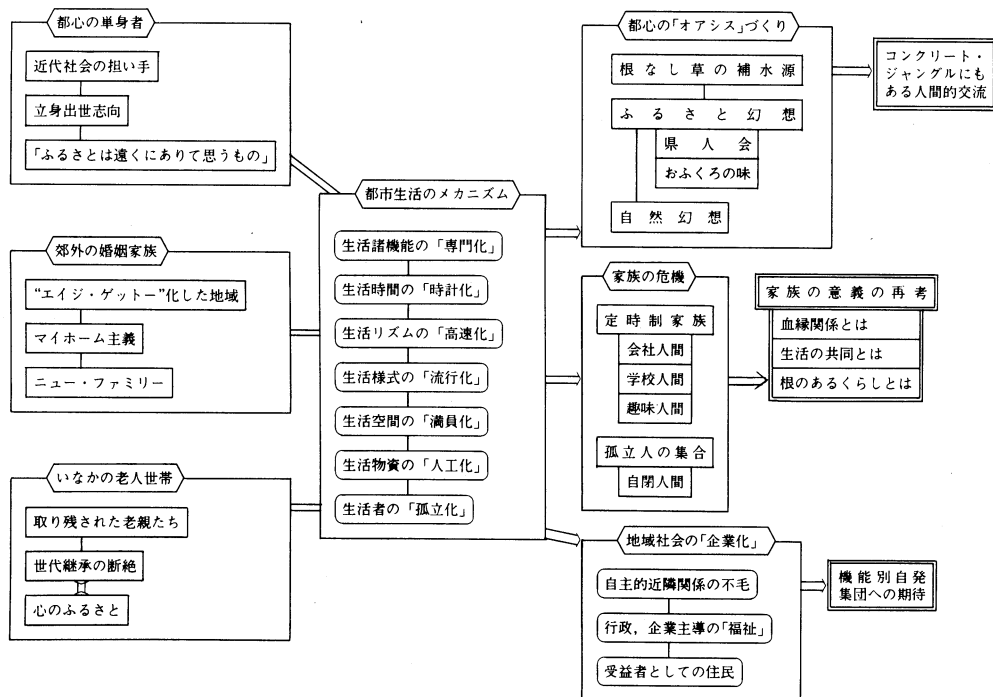
(5) T氏の社会観
〔T氏；36歳，男性，会社員，企業主催）
の「祭」を企画，箕面市在住〕

T氏の場合、「社会」ということばからイメージされるのは、現代社会の成り立ちのメカニズムであるという。そこで、彼はみずからの生いたちよりも、現代の、とりわけ都市社会の構造を客観的に語るという方法をとった。以下ではT氏のいわば都市社会論を概説する。

現代社会に生きる人間のタイプをその居住空間で大きく分けると、第1に、都心に住む単身者。彼らは近代社会の発展の主な担い手であり、郷里から立身出世の志を抱いて都会に出てきた人々である。第2のタイプは郊外に居を構える婚姻家族であり、マイ・ホーム主義、ニューファミリーといった流行現象の担い手である。したがって、これらの家族の年齢的、職業階層的な属性は互いに似ており、郊外の宅地地域は今や“エイジ・ゲットー”と化している。第3には、前二者たちから取り残されたかたちで田舎ぐらしをする老人たち、世代継承の夢を失い、しかも転出世代のいささか身勝手な言い方でいえば「心のふるさと」を守って、自分たちの継承してきた生活習慣に従ってそれぞれの土地に生きる人々である。

さて、都市社会の生活の特徴づけるメカニズム

図5 T氏の社会観の要素連関図



として、次のようなことがらをあげることができる。1)生活諸機能の「専門化」(たとえば外食産業、塾、便利屋の繁盛)、2)生活時間の「時計化」(スケジュール、時刻表が人間の行動パターンを決定する)、3)生活リズムの「高速化」(能率中心の機械のリズムに人間の生体リズムが適応する)、4)生活様式の「流行化」(たとえばファッションとしてのシンプル・ライフや健康指向)、5)生活空間の「満員化」(人々の欲求充足の場の特定の箇所、たとえば遊園地、デパートへの集中)、6)生活物資の「人工化」(たとえば「川」の流れる地下街や「民芸風」量産品)、7)生活者の「孤立化」(たとえばウォークマン族の出現やアパートの「孤独な白骨死体」)。

これらの非人間化を促進する社会動向に対応して、都心部では擬似オアシスづくりが進められる。たとえば根なし草の都会人のふるさと幻想を満たす県人会の存在、一刻のふるさとを求める酒場の常連、おふくろの味を売りものにする飲食店の存在などを例にとることができる。

都市生活の諸機制はまた、家族集団の存続を危機に追い込む。会社人間、学校人間、趣味人間と

しての家族成員は、それぞれの生活の根拠地を家族以外のところに置き、個々別々にくらしつつ、一定の時刻になると家屋という入れものに集合するだけといった傾向があらわれてきている。

地域社会もまた、人々の生活の場としての意味を失い、近隣の交流は薄れて、住民は行政や企業主導の地域運営の消極的な受益者(ときには受苦者)でしかなくなりつつある。

T氏はこれら諸領域での問題現象に対して次のように考える。まず都心の幻想に対しては、幻想は幻想にすぎ、むしろコンクリートジャングルをありのままに見ることによって、そこに生きる人間たちが本来の人間的交流を開始できるはずである。家族の危機に対しては、今こそまさに家族というものの意義が再検討されるべきときであり、たとえば、血縁関係とはいったい何か、婚姻・血縁関係者たちが生活を共同するとはどういうことか、いこいの場としての家庭のくらしのありようとはどんなものかといったことについて、人々が突きつめて再考しなければならない時代である。地域社会のあり方については、従来の自生的近隣関係ではなく、これからはむしろ、生活諸機能別

の自発的集団、いわゆるアソシエーションの複合的な共存のネットワークによって地域社会がささえられるようになる（べきだ）と思われる。

3. 「社会観」にあらわれた人間集団 ——現代の人間関係の特徴

5人の社会観に共通するのは、それらがいずれも何らかの人間集団とその集団内での人間関係に焦点をあてて語られていることである。その語り口は、その集団に所属する者として内在的で、ときに感情移入的であるもの、逆に、所属したり関与したりはしているけれども集団のいわば外側から客観的に診断しているものなど、話し手それぞれによって異なる。しかし、5人の話の展開のなかにあらわれた人間集団は、タイプ別にみると5つに分けられる。それらは、①「家族集団」、②「職業集団」、③「教育集団」、④「自由参加集団」、⑤「近隣集団」である。

そこで、これら5つの集団のそれぞれについて、(a)その集団の現時点での存立機制の特徴、(b)そこでの人間関係にみられる特徴と、そこから生じる問題現象の例、(c)現状に対する反省と今後の課題

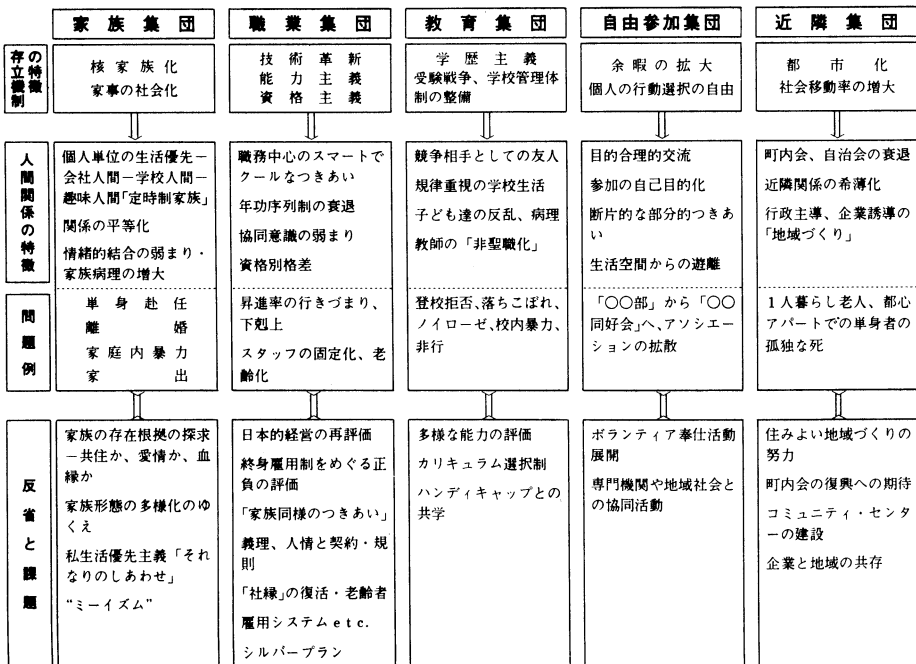
とを抽出してみた。図6がその概略図式である。

図6について解説しよう。

① 人間関係の最も基底をなすと考えられる「家族集団」、この集団の現在のあり方を規定している条件のうち、顕著なのは、成員構成の核家族化（夫婦と子ども）と家事の専門機関への移行（たとえば外食産業、クリーニング業など）であり、それらの条件のもとに、家族の生活は個人単位のパターンをとることになる。たとえば会社人間（→単身赴任）、学校人間、趣味人間など。そしてそれぞれ独自の生活スタイルをもつ人間たちが、たまたまひとつの家に共住するという定時制家族が出現し、そこでは年齢差、性差をこえて家族員の立場は平等化するが、他方、接触の頻度、密度の減少から生じる現象としては、家族としての一体感の稀薄化、情緒的な結びつきの弱まり（および、その対極としての、たとえば母子の過度の密着）がみられる。これらの現象が病理的な形態として出現するとき、それらは離婚、家庭内暴力、家出、蒸発、近親相姦というかたちをとるといえる。

家族関係のゆがみ、孤立化の傾向に対して、

図6 社会を構成する諸集団と人間関係



現在、萌芽的に現われつつある反作用として、ひとつには家族関係のあり方についての問いなおし——共住の根拠は何か、血縁なのか、愛情なのか、分業なのか——もうひとつには、私的な生活領域の再評価——新たなマイホーム主義、ミーイズム——があげられる。

- ② つぎに「職業集団」の現在のあり方を条件づけているものとしては、近年その進展のめざましい技術革新、および雇用、昇格条件としての能力主義、資格主義が考えられる。この集団の人間関係は、職務を中心とした限られた時間でのスマートでクールなつきあい（および、それとはうらはらはな、わずかの業績・地位格差をめぐる競争の激化）、年功序列制の衰退と資格別格差の増大、総じて会社人間の仕事としてのつきあい、ということによって特徴づけられる。

このような関係への反省として、いわゆる日本の経営の再評価の傾向、たとえば職務をこえた親密なつきあいや、終身雇用制の保持など、情緒的な結びつきの契機が見直されつつある。あるいはシルバープランの実施などもあげられる。

- ③ 第3の集団、「教育集団」が未来に対して負う役割は大きい。この集団の置かれた条件は、まず何よりも社会全般にわたる学歴主義であり、それを反映しての受験戦争である。また学校運営における設備、人事、カリキュラムなどの管理体制の確立ということである。

そこから引き出される人間関係の特質は、教科学習中心の教師—生徒関係、競争を軸とした友人関係であり、その結果としてあらわれるのが、たとえば、教師の「非聖職化」（サラリーマン化、アパシー化）現象や、子どもたちの「反乱」（非行、校内暴力など）、「落ちこぼれ」（登校拒否、ノイローゼなど）といった現象である。

これらの「病理」現象への反省と克服の手がかりとして現われつつあるのが、多様な人間の能力の多元的評価の試みであり、その具体策としては、カリキュラム選択制、職業教育、ハンディ・キャップとの共学などの実施

である。

- ④ 第4番目の「自由参加集団」、具体的には、各種サークルや市民運動団体、宗教団体などの状況をみよう。この集団の現在のあり様を条件づけているものとしては、第1には人びとの余暇時間の増大、第2に個人の行動選択と集団参加との自由度の増大である。この集団における人間関係の特徴づけるのは、一方では個人の目的追求の手段としての集団という側面から生じる断片的交流、また逆にもう一方で、集団参加それ自体を目的とするところから生じる感情移入過剰型のべったりづきあいであり、前者は孤立した個人の単なる集合としての形式的関係に陥る危険性を、後者は具体的な生活状況からの遊離の危険性を伴っている。

このような陥穽への反省と予防として展開されている活動としては、ボランティア奉仕活動、地域活動や専門機関の業務への協力がある。

- ⑤ 最後の「近隣集団」（もう少し丁寧になら、ある一定範囲の居住空間の共有を契機とする人びとの集まり）、この集団の現在のあり様を条件づけるものは何か。より大きくとらえるなら、それはまず第1に都市化、それに伴う生活条件の変化——たとえば環境の人工化、過密化、生活リズムの加速化など——、第2に人びとの長期、短期の移動率の増大——たとえば「いなか」→都心→郊外への転居、職場と家との往復距離の増大——をあげることができる。

このいわゆる近隣集団における近年の人間関係の特徴として、自治会、町内会活動の衰退、より個別には近隣づきあいの稀薄化があげられるだろう。これらの関係の弱体化を補填すべく（というよりむしろ、近隣関係の現状を導いた一因であるかもしれないが）、行政主導、企業誘導の生活機能充足サービスが個々の家庭に提供される。たとえば地域の境界が行政区画によって決定され、企業の宅地計画、商業地区選定が住民の生活圏を決定するというかたちでの「地域づくり」と、それを受動的に受入れるか、あるいは無関心なま

まの住民たち，という構図を，現在そこここに発見できる。

だが，他律的な地域社会のあり方への反省や，住民自身の自発的な近隣関係づくりの活動も確かに存在する。町内会の復興や自治会結成を求める住民の声，コミュニティセンターの建設，企業側の協力，援助の申し出の利用などはその例である。

＜付言＞

社会を構成する主な5集団についての5人の人々のそれぞれの考え方，受けとめ方と現状打解案の提案は，おそらくは来たるべき社会への展望，彼（女）らが望んでいる社会観でもある。そこに流れる基調底音は，多様な機能集団，共存集団のもとでの，自由な人間たちの開かれた関係への希求の声であるように聴こえる。